

北海道合鴨水稲会

水かき通信

第11全国合鴨フォーラム北海道大会報告

報告者 木村篤

去る2月27、28日の両日に今世紀最初となる、第11回全国合鴨フォーラム北海道大会が札幌市の定山溪温泉「定山溪ホテル」で開催されました。大会の開催には全国合鴨フォーラム北海道大会準備委員会が発足して以来、実行委員会へと運営が移るなか、実に2年を費やして準備をしました。

大会のテーマは、「合鴨と育む共生の大地～合鴨北へ飛んだ！～」。今回は全国合鴨水稲会設立の10年目の節目となる大会です。この10年で合鴨水稲同時作は西日本から北海道まで広がりました。この10年の想いをお互いに確認し、今後に伝える大会

でもあります。道内から約140名、道外からの参加を含めると約300名が大会に集いました。

大会は、午前中のプレフォーラムを皮切りに、午後から本大会が始まり、翌28日にかけて行われました。北海道主催の大会は2日目の朝まで、その後は全国合鴨水稲会の10周年記念行事になりましたが、今大会の目的は十分に達成でできたと思います。

プレフォーラム

午前10時からのプレフォーラムは、北海道大学名誉教授の但野利秋氏による「合鴨米の品質と食味をめぐって」と題した講演が行なわれました。午前中から遠方より多くの人が集ま

り、約150名が参加しました。

但野氏の講演は、一般的な米の食味とその良食味を決定する成分や物理的な特性について行われました。但野氏は直接合鴨水稲同時作に関わる研究に携わっているわけではありませんが、米の食味を巡る一般的な話題を提供し、折に合鴨を水田に放つことによる食味への影響にも話は及びました。例えば、合鴨を水田に放飼することによって窒素供給量は慣行水田のものとは明らかに異なります。

但野氏による講演の終了後、会場の参加者からは活発な発言が行われました。会場からの発言の多くは米の食味計の信頼性を巡るもので、そのことを中心に議論が展開されました。



大会の趣旨説明を行う浅野実行委員長

本大会の開会

正午過ぎから大会参加者は一気に増え、全国合鴨フォーラム北海道大会の開会が高らかに宣言されました。午後1時半よりホテル2階の芙蓉の間にて大会長の三島徳三氏の挨拶があり、続いて実行委員長の浅野晃彦氏による北海道大会の主旨説明の後、5つの話題提供が5人の報告者になされました。

フォーラムのメインは分科会

今回のフォーラムは、参加者同士の議論を重視するという主旨で分科会形式がとられました。

フォーラムの中心となるのは5つの分科会です。まず、各分科会に先立ち、それぞれに対応した5つの報告が行われました。報告者はいずれも北海道合鴨水稲会の会員で、大規模でしかも都府県と気候風土の異なる条件下が実践されている合鴨水稲同時作に関する話題、また全国から集まった参加者に共通する話題を提供しました。

第1報告

「合鴨と共に生きた10年」

折坂義一氏は、合鴨水稲同時作を始めた当時の家族のホームビデオを紹介し、それに基づいて、現在の家族と合鴨との大切なつながりについて話しました。折坂氏が最も強調したのは、合鴨を通して再発見した家族の絆。また、なぜ自分の圃場に合鴨が泳ぎ続けているのか、それを改

めて考えさせるきっかけを会場に投げかけました。会場の中には、合鴨水稲同時作を始めた頃の自分を思い出した人もいるかもしれません。

第2報告

「でっかい田んぼで目指すゆとりの農業」

第2報告の佐竹良州氏は、合鴨水稲同時作に基づく地域や人々との関係を、スライドを用いて紹介しました。佐竹氏は、地域の人たちと共に取り組んだ特別栽培米の生産を契機に始めた合鴨水稲作の歴史、またその大規模面積にまで拡大する経緯を説明しました。合鴨水稲同時作を始めたことによって生まれた人々とのつながり、地域ぐるみの様々な活動をスライドで紹介しました。

第3報告

「合鴨農法と循環型農業」

第3報告の今橋道夫氏は、循環型農業の実現を目指して、合鴨水稲同時作を取り入れたこと、現在実践している活動内容や、その効果について報告しました。どのような空間で、農業を営みたいだろうか、また農業を通じてどのような空間を作っていくたいか、ひいてはどのような地域づくりを進めて行くのか。合鴨水稲同時作を含めた循環型農業の可能性について報告しました。

第4報告

「いろいろあるよ、農産物の売り方」

第4報告は、報告予定の瀬川守氏の代役として浅見和司氏が報告しました。浅見氏は、当麻グリーンライフ設立の経緯や活動内容を紹介した後、合鴨米を消費者へ、丹精込めてつくった米を食べて欲しいと訴えました。様々な方法によって販売を展開している当麻グリーンライフの事例をもとに今後の可能性を提示しました。

第5分科会

「医療現場から農に期待すること」

第5報告は、長谷川浩氏が、医療の現場から農に対する考えを会場に訴えました。アレルギー等の現代病に憂慮し、生産者とは異なる立場から、合鴨水稲同時作にかける思いに熱弁をふるいました。食べ物だから安全なものを、未来を担う子供達のアレルギーの原因を追求する小児科医師の実体験をもとにした報告は、食糧生産のあり方を改めて考えさせるものでした。

各分科会会場にて

以上のような話題提供が終わった後、15時半より分科会がホテル地下の各会場にて開かれました。参加者は各話題提供を参考に参加したい分科会に分かれ、各会場での議論が繰り広げられました。各会場は、人数の多少はあるものの、それぞれの思いをもった参加者が集い、時間内では議論が収まらないほどの盛り上がりとなりました。

第1分科会

浅野氏の司会のもと、話題提供者の折坂夫妻を含めて参加者が車座になり、あえて技術論ではなく、合鴨水稲同時作に取り組むことによる精神面での意義が議論されました。話題が教育問題に及ぶと、会場からは「自分は55歳だが生まれて間もない合鴨のひなとお風呂に入るととてもうれしい。ましてや子供であればものすごく喜ぶだろう。」「近所の子供や消費者にひなを貸し出したらいいのではないか。」などの発言が出されました。最初は15名ほどでしたが、活発な議論、楽しい雰囲気に参加者も次第に増え始め、最終的には25名ほどの会場となりました。

また、将来的には、何らかの形で合鴨農家の子供の成長を報告するとか、農家同士のホームステイを実施してはどうかというアイデアも出されました。

第2分科会

定刻には30名程度の人が集まり、高嶋浩一氏の司会で開会しました。まず報告者の佐竹氏より、合鴨水稲同時作を始めた経緯や栽培管理上の工夫などが話され、化学肥料による栽培と有機肥料による栽培では、そのなかで稲も米も質が大きく違うことが強調されました。

議論が進むと会場からは、ひなのサルモネラ菌対策や田んぼの「ミステリーサークル」問題、ひなの飼育など合鴨水稲同時作に関わる技術的

な問題点が全国各地の参加者から出され、活発な議論が行なわれました。また、秋田県大潟村で16ヘクタールの合鴨水稲同自作を実践する農家の方の参加もあり、大規模な合鴨水稲同時作では、整地や電気牧柵などの囲い資材のコスト、鴨の屠殺・販売などが課題であるとの声がありました。

第3分科会

会場には司会役の築城氏と今橋氏を中心に約40名の参加者が集いました。最初に今橋氏の話題提供に対する質問から始まり、畦のハーブ、有機認証と空中散布、雑草対策、収量問題などを論点として議論が展開しました。畦のハーブについては、どの種類のハーブが適するか、雑草や害虫対策にどのくらいの効果があるか、また景観への効果、料理の利用といったことを話題に活発な話し合いとなりました。

内容のある議論、会場の熱気そのままに、最後に参加した消費者からは「質問や意見が途切れることなく続き、全国から集まって来た人たちの熱意を感じた」という感想で会場は締めくくられました。

第4分科会

分科会は大塚氏の司会により、まず参加者の自己紹介で始まりました。続いて有機農産物認証の必要性や認証を得るための課題や問題点を巡る議論、そして米や合鴨肉の販売につ

いて生産者それぞれの状況が話し合われました。

認証の必要性について参加者からは、「産消提携で販売できる比較的小規模の場合は必要でない」、「しかし外国産有機農産物対策として必要である」などの意見が出されました。認証の課題については、記録面の手間や資材・種子などの素性の不明確さが指摘されました。米・合鴨肉の販売については、各参加者がそれぞれの取り組みの状況を紹介し、参加した消費者からも活動を応援する意見がありました。

始めは25名ほどであった参加者は、時間の経過とともに増え、最終的には40名ほどとなりました。

第5分科会

第5分科会には約100名近くの参加者が集い、司会は大窪氏が務めました。長谷川氏はスライドを用いながら、話題提供の続きとしてアレルギーや化学物質過敏症、中毒などを詳細に説明しました。

その後は、長谷川氏を中心として参加者からの質疑応答という形式で話し合いが進められました。消費者からは、「生産者の熱意が消費者に十分伝わっていないのではないか」、「地産地消の活動をもっと拡大することが望まれる」という意見が出されたほか、環境学習や食教育に対する必要性が改めて確認されました。

大懇親会盛況に終わる

大会1日目は、大会参加者が一堂に会する大懇親会で締めくくられました。テーブルに並ぶ料理は、北海道の幸、合鴨肉、合鴨米をふんだんに用い、味、量ともに満足するものでした。

大懇親会は、北海道有機農業研究協議会の木村宏氏による乾杯を皮切りに幕を開けました。続いて大会会場である定山溪ホテルの林専務の挨拶、料理の説明を受け、会場の雰囲気盛り上がり始めた頃に、折坂氏が率いるロックバンド「ギイチズ・コズミック・ジャムバンド」が満を持して登場し会場全体を沸かしました。さらに、懇親会司会の高嶋浩一氏の音頭に乗って、北海道内外を問わず、参加者がステージに乗り出して踊りを披露しました。その後も参加者はテーブルを自由に移動し、全国から集った仲間たちと交流を深めました。参加者の交流は尽きることがありませんが、大懇親会は開始後2時間で終了し、会場の盛り上がりは衰えることなく2次会へと引き継がれていきました。

2次会会場では、畳の上でお互いが膝と酒を交え、大懇親会のテーブル形式よりずっと密な交流が図られました。ここでは大懇親会で、話す機会のなかった人たちの新たな交流が生まれていきました。

日常では、ほとんど接点を持ち得ないような全国津々浦々から集まった参加者が、合鴨水稲同時作を語り

合い、農業について考え、意見を交える場所となることが、懇親会の目的です。北海道大会の基本的な理念でもある、地域を問わずお互いを認め合い、関係を深めていくという姿勢は、北海道内外に関わりなく会場全体を巻き込んで今大会の懇親会に体现されました。地域を越え多くの参加者が、意義のある時間を共有できたことを確信しています。

創立10年記念行事

2日目は、まず8時半より前日の分科会では、それぞれの会場でのような内容が話題となり、議論されたのか、ということが報告されました。続く9時半からは全国合鴨水稲会にバトンを渡して、全国合鴨水稲会創立10年記念行事が執り行われました。記念行事の内容は、基調報告、記念講演、そして生産者、消費者、流通業者のそれぞれ立場からのスピーチでした。

基調報告は、「合鴨水稲同時作の10年とこれからの課題～伝統的なアヒル水田放飼～」と題して全国合鴨水稲会世話人代表の古野隆雄氏が、古代中国に存在したアヒル水田放飼から現在の合鴨水稲同時作に至るまでの歴史を説明し、会発足10年を区切りとして今後の課題を提示しました。報告の中で古野氏は、除草労働の代替として導入された合鴨が、水田の多様化をもたらす契機に至るまでの進化を述べ、今後のさらなる発展の可能性とその課題について言及

しました。

記念講演「日本農政の転換と合鴨農法」では、大会長でもある北海道大学農学部三島徳三氏が、近年の日本農業政策の路線転換を背景に、合鴨農法を含む循環的農業が再評価される現状について報告しました。世界的に展開してきた近代的農業が生んだ自然破壊、生態系への影響、旬の喪失といった弊害・矛盾が明らかになるにつれて、循環的農業が国際的にも見直され、農政の路線転換に結びついていることを述べるとともに、これからの農業のあり方としての地産地消の概念と食文化との密接な関係を明示しました。そして最後に、合鴨農法が循環的農業のシンボルひとつになりうると締めくくりました。

続く「それぞれの10年とこれから」と題したスピーチでは、生産者として岩手県の岩崎隆氏、消費者として広島県の消費者アドバイザー出路千恵さん、流通業者として東京都金沢米店の砂金健一氏が、それぞれの立場からどのように合鴨農法に携わっているのかが報告されました。

岩崎氏は、水田に合鴨農法を導入した経緯や合鴨農法を通じて生まれた地域の取り組み、地域を巻き込むに至った活動について語り、合鴨農法と出会ったことによって生まれた消費者とのつながり、食や環境の大切さを訴えた。

出路さんは、「合鴨料理本」の編集委員として携わり、出版に至るまで

の経過や苦勞を述べる一方、合鴨水稲同時作がより普及するためには、消費者に合鴨料理が食文化として定着することが必要であると語った。

現在東京都で米穀店を営む砂金氏は、教員時代に得た体験や意識から米屋への転職を遂げたことに触れ、都会と農業との乖離に危機感を覚えると述べた。そして従来の米屋とは異なる経験と意識を持っているからこそ、こだわりの米を提供し、都会と農家を結びつけ「都会に存在する意味のある米屋をめざす」という思いを語った。

最後に以上の講演、報告を受け、熊本大学文学部の徳野貞雄氏は、これからの合鴨水稲同時作の課題とそのあり方を述べて全国合鴨水稲会創立10年記念行事を締めくくった。



おわりに

北海道大会の開催にあたり、実行委員会として運営に主体的に携わり、無事成功したことを嬉しく思っています。フォーラムの当日ギリギリまでさまざまなトラブル、不備が絶え間無くありました。しかし、この受け入れ側、主催側としての経験は自分にとって大きなものでした。大学ではありえない経験、人との接点。

当然、実行委員の中でも反目、意見の対立はありました。しかし、そんな困難や煩悶を全てうち消すほど、大会成功の喜び充実感がありました。これだけだと単なる自己満足かもしれませんが、あの大会会場、分科会、懇親会にいた参加者の表情、多くの声を思うと自分が自己満足するに十分足る大会を達成できたと確信します。

次回全国フォーラムの香川大会では、わたしたちとはまた違った価値観で大会を作り上げると思っています。ぜひ主体性を持って自分たちのカラーを出し切った大会を成功させて欲しいものです。

(北大農学研究科大学院)

報告者 北川望美

7月14日、合鴨水稲会の圃場見学会が行われ、大塚利明さんの農場、大塚農場を見学させていただきました。会員の生産者の方々、学生、道職員の方など、あらゆる方面の方が参加され、大いに盛り上がりを見せました。

初めに圃場の見学をさせていただきました。大塚さんは水田10haのうち2haで合鴨農法による米の無農薬栽培を行っておられ、合鴨農法は、試行錯誤を続けながら、今年で7年目にもなられるそうです。合鴨農法を行っている水田は2カ所あり、私達はそのうちの1つ、90aの水田を見学させていただきました。

合鴨の生育状況として、今年は2haで200羽の雛を購入、生存率は高く、現在も190羽ほどの合鴨が元気に活躍していました。

水田は見たところ非常にきれいで、雑草はほとんど見られませんでした。いつも餌をやっている水田脇の場所に近づくと、合鴨達がいっせいに集まり、愛らしい姿を披露してくれました。

餌は毎朝一回、そこでくず米、くず麦などを与えるそうです。そうすることによって、合鴨を引き上げる際、合鴨を集めやすいとのこと。しかし、餌を与えすぎると合鴨が雑草を食べなくなり、合鴨農法のひと

つの目的である除草効果が小さくなるそうです。ただ、合鴨はヒエを食べないため、ヒエの除草だけは必要で、大塚さんは、ヒエを生えさせないことと、種を落とさないことが大切だと仰ってました。ヒエは種を落とすとうと確実に次の年生えてくるそうです。水田の稲の間をぬって行うヒエぬきは非常にきつい作業ですので、(私達もやらせていただいたことがあります)これを何とか抑えることは、非常に大きな作業の軽減になるそうです。そして、今年は田植え後に米ぬかをまく、「米ぬか除草」も試みられ、米ぬかと合鴨によって、例年に比べ、ヒエの育成を抑えられ、除草効果が非常に高かったとのことでした。

外敵の防止方法としては、ワイヤー、ネット、電気柵を使っている。外敵はきつね、ハヤブサ、とびなど。合鴨はまだ雛のうち、とびは一度に2、3羽食べてしまうので被害が大きいそうです。また、ワイヤーではきつねの飛び込みは防げないということでありました。大塚さんは外敵による被害は、ある程度仕方がないと考えられており、柵やネットを増やすよりは、食べられてしまう分の合鴨の数を最初から計算に入れて増やすというくらいのスタンスで、外敵からの被害を最小限に抑え、合

鴨農法の実施に支障をきたさないよう行われておられました。

大塚さんの合鴨農法による圃場見学の後、参加者達の意見、情報交換の場が設けられ、農法についての失敗談や、成功例、また、販路や無農薬栽培等の認証制度のあり方などについて話し合われ、盛んに意見、質問が飛び交っていました。

最近アレルギーや健康志向から



会合の風景。大塚農場の事務所の2階で参加者達の間で情報交換を行う(左から3人目が北川さん)。

無農薬栽培への関心が高まっており、生産者の方が米の生産が注文に追いつかないケースも多くみられるとのことでした。また、居酒屋、レストランを中心に合鴨へのニーズは高いということも改めて知りました。合鴨農法によって生産された米に対しても、合鴨に対しても消費者のニーズが高いというのは注目すべき点であります。

私達が一番心に残ったのは、水田では稲がすくすくと育ち、その間を合鴨たちが元気に動き回る、そんな自然の元気あふれる姿、そしてそれを支える大塚さんの農業にかける意気込みでした。それこそが現代の日本において最もかけている部分であり、これからの日本農業の新たな可能性でもあります。今後、合鴨水稲会の会員さんをはじめ、生産者の方々の絶え間ない努力が、多いに日本の“元気”を支えていくことでしょう。

(北大農学部 農業経済学科)



元気いっぱいのアイガモたち

2001年度北海道合鴨水稻会総会報告

報告者 日向貴久

圃場見学会の翌日の7月15日、宿泊場所の月形町・道民の森で、今年度の総会が開催されました。

残念ながら、参加者は20数名と少なかったのですが、2000年度の事業報告および決算、2001年度の事業計画、予算案などが議題として出され、承認を受けました。議長には間山幸雄さんが選出され、議事進行を行っていただきました。

前年度の事業報告では、昨年度のタカシマファームでの圃場見学会、岩手大会への派遣、全国大会実行委員会の開催状況が

報告されました。また、全国大会に関連して、特別会計の決算と、本会計への繰越が承認されました。

その他の議題として、会費の減額や団体会員の設置、会費の長期滞納者の処遇などについての提案が出されました。しかし、会員総数の半分未満で重要事項を審議するのは無理ということから、これらの議題に関しましては、改選後の新世話人会に一任して、来年度の総会で承認を得るという形で意見の一致をみました。



新世話人の改選について

事務局

今年度は世話人改選の年度にあたります。例年であれば、総会の会場で各ブロックごとに世話人を選出するのですが、7月に行われた総会では参加会員の人数が少なかったことから、選出が先延ばしになっていました。後日、各ブロックで選出し、9月の世話人会で新世話人の事後承認を認めることが総会で決まりましたが、その世話人会でも先送りとなっており、先日の世話人会(11月20日)にようやく新世話人、ならびに代表世話人が決定しました。

各ブロックの世話人、代表世話人は以下の通りです。

道北ブロック：

浅野晃彦さん(旭川市)

間山幸雄さん(中富良野町)

道央ブロック：

今橋道夫さん(美唄市)

川本隆幸さん(北竜町)

道南ブロック：

大塚利明さん(当麻町)

高嶋浩一さん(北広島市)

代表世話人：浅野晃彦さん

事務局はこれまでどおり、大原睦生(新得畜試)さんを事務局長として、北大大学院が担当していきます。前年度まで世話人を担当された皆さん、お疲れさまです。

全国合鴨フォーラム四国大会開催のお知らせ

事務局

は12月25日となっております。なお、当会事務局にもご一報いただければ、幸いです。

2002年1月26日(土)、27日(日)に香川県香川町にて全国合鴨フォーラム四国大会が開催されます。四国で初めての全国大会ということもあり、全国各地から多くの生産者、消費者の参加が見込まれます。

参加される当会会員の方には、北海道合鴨水稻会の予算から費用の補助を受けることができます。申込は同封の案内に従って、四国大会事務局までお願いいたします。申込締切



事務局よりお知らせ

□出版物の紹介

当会の会員である、今橋さん、浅野さんを事例として取り上げた出版物が発行されています。

寺本・市川・志賀編著「21世紀北海道農業の先駆け（北海道地域農業研究所 学術叢書3）」筑波書房、2001年8月。（2,500円）

□北海道合鴨水稲会入会案内

当会の主な活動は、総会及びフォーラム、圃場見学会、『水かき通信』の発行、全国合鴨フォーラムへの会員派遣等です。入会されますと、行事の案内状、『水かき通信』が届きます。入会の手続きは、当会事務局に連絡して頂くと入会申込書を送りますので、それに記入後、送り返して頂き、年会費6,000円を納入して頂くと入会できます。

□2001年度会費納入のご案内とお詫び

北海道合鴨水稲会の2001年度年会費6,000円の納入をお願いいたします。同封の振込用紙をそのままお近

くの郵便局へお持ちいただいて御自分のお名前を書くだけで、その他の面倒な記入や手数料は一切必要ありません。

今年度は、全国フォーラムの北海道開催という大行事もあり、水稲会の財政が底をつき始めております。合鴨水稲会の予算は、全て皆様一人ひとりの年会費からなっておりますので、どうぞよろしくお願ひします。なお、今年度および過年度の年会費納入のご案内に関しましては、別紙にてお知らせいたします。

振込先：北海道合鴨水稲会事務局
口座番号：02700-3-38241

最後になりますが、事務局の不手際で納入のご案内が年度末になった事を深くお詫びいたします。

□水かき通信記事投稿の募集

水かき通信に掲載する原稿を募っています。気軽に原稿を事務局のほうまで送って下さい。随時受け付けています。原稿の形式は問いません。

編集後記

日暮れが早くなり師走12月を実感します。修士論文を控え自らの怠慢も重なり多忙な毎日ですが、なにが何でも今年度中に完成させて、北海道の合鴨農業の一力となるようがんばります。

（木村）

何とか僕にとって初めての水かき通信ができました。とは言っても、外はもう雪景色。しかも、事務局の一線を（一応）退いた大先輩、宮入さん

の助けがあつての完成。自分達だけだったら、なにもすることができずにまだまだ発行が遅れたと思うとぞっとします。さあ宮入さん、論文のお手伝いしますよー。（日向）

木村・日向の事務局新体制となつての通信第1号。お疲れ様です。仕事の速さでは定評のある2人ですが、会員の皆様のご支援のほど何卒お願いいたします（宮入）。



通信作成中の事務局員（奥から木村、日向、門谷）。AM2:00撮影。

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第12号
2001年11月30日
発行：北海道合鴨水稲会
（連絡先）北海道合鴨水稲会事務局
〒060-8589 札幌市北区北9西9丁目
北海道大学大学院農学研究科 農業経済学講座
木村 篤・日向 貴久・河本 陽介・門谷 悠超
TEL：011-706-4997
FAX：011-706-4179